

2005.09.10 タツノオトシゴ



会員みなさま、「収穫の秋」、「芸術・学問の秋」になってきました。それにしても関西では連続 60 日以上真夏日が続き、クマゼミの大発生がありました。夜は暑くて寝苦しく、朝早くからクマゼミの大合唱！さすがに 6 時を過ぎると目が覚めてしまいます。(年のせいかも?) 十数年を地中の中で過ごした蝉の幼虫が一斉に出てくる訳ですが、来年出てくる幼虫は何処に隠れているのでしょうか？大きな目覚まし時計でも抱えて、「今年はまだまだ…」なんて言いながら、頑張っているのでしょうか？温暖化が進み、そろそろ東京にも“くまぜみ”の進出が始まっているそうです。最近のニュースでは、関東地方にも“毒蜘蛛”が見つかっており、墓掃除の際には手袋を準備して出かけてくださいネ(^_^)



静寂

今回は、身近に起きている「**防衛機制**」についてのお話です。現代社会において「心の病」が、いろいろ言われていますが、本来は自分の心の中で処理できるメカニズムがあるのです。

A.フロイト(S.フロイトの娘)により、体系化された「**適応機制(防衛機制)**」は、現代にも通じる点が多く、学問的にもさらに解明作業が続けられています。心に大きなショックを受けると、記憶喪失になることがあります。この場合は、大容量の電気が流れると「ブレーカーが落ちる」という事態に似ています。脳の機能にダメージを受けないために、最小限の被害(記憶喪失)で食い止めているのです。いやな記憶や怖かった経験も、時間が経つと薄れていくのも、少しずつの記憶消去がなされているからでしょう。

(大事な事をすぐに忘れるのは、うさおさんの特技です)



誕生

<イソップ物語>の中で「狐と葡萄」の話があります。葡萄を食べようと、何度も飛びつき、失敗した狐は諦めてすごすごと帰っていきます。そのとき「どうせあの葡萄は酸っぱくて不味い葡萄に違いない」と負け惜しみの一言を漏らします。そういう風に自分を納得させることで、いやな事を早く忘れることができるのでしょうか。この場合の狐の心に生じた適応機制を『**合理化**』と呼んでいます。「試験で悪かった成績」の結果をみて、「試験の



清涼

前日に A さんに誘われて飲みに行ったのが悪かった！」というように自分の努力不足を受け入れず、理由をつけて正当化してしまう！よくある話でしょう。(諦めが悪く、負けず嫌いの人に多いパターンかも)

次に『補償』というものを紹介します。小学校の低学年では、同じ学年でも早生まれと4～5月生まれの子供では体力の差が大きく出てきます。かけっこや運動

競技で一番になると女の子から“B雄さん、素敵！”なんて言われた経験がありませんか？残念ながら早生まれで病弱であったツツノオトシゴは、羨ましく見ているだけの毎日でした。でも、算数の試験や国語の書き取りテストでは、B雄君に教えてあげられる立場でした。このように「スポーツ」ではだめでも、「勉強で頑張る」というのが、『補償』という防衛機制に該当します。器用貧乏の人は、この『補償』が多すぎたりした人かも・・・？

建築の設計や絵画・音楽・文学等の芸術を志す人には、早生まれの人が多そうです。これも、新学期が9月に変わったりすると、また違う結果になるのでしょうか。

子供の頃(幼稚園から小学校低学年)を思い出してください。他の人がそばにいない時は、和やかに遊んでいる男子と女子がいます。(C男くんはD子ちゃんが大好きです)

ところが、クラスメートと一緒に遊んでいるときは、C男くんがD子ちゃんをいじめています。いったいこれはどうした事なのでしょう？(いじめられた人はいませんか？)

これは『反動形成』という防衛機制で説明されています。本来の自分の心とは反対の行動をとることで、社会適応(バランス)させているのです。大人になっても、この『反動機制』は現れます。たとえば、普段はいやな上司でも、本人の前では“おべっか”を使って「相手を持ち上げる」行動パターンがそれです。

会社では不人気の上役ほどお中元やお歳暮がたくさん来ます。いかに『反動形成』の部下が多いか、本人は意外と気が付かずにいるものです。(贈り物も、数が多ければ良いってものではなさそうです)



炎天



爽快

『投影』とか『同一視』といわれる防衛機制があります。名前のイメージが似ていますが全く違う内容です。分かりやすい『同一視』から説明しましょう。Cacooさん達がコンサートに行き、自分のお気に入りの歌手がしていることを見ながら、会場での一体感を味わいます。他人の態度や行動を自分に取り入れ、あこがれている人の真似をするなど、身近な事例は多くあります。教育現場にとって、これは非常に大事な要素であると言われています。阪神タイガースのY選手が試合に出れないと、自分も落ち込んでしまい応援に力が入りません。「ファン」の心理が『同一視』に近いように思えます。

会社で同期入社の子社員（EさんとFさん）が、それぞれ結婚し社宅に入ります。二人は普段から仲もよく、それぞれ家族ぐるみの付き合いをしていきます。奥さん同士も、同じように付き合い、大変友好的です。何年か後に、Fさんが係長になりました。Fさんの奥さんも、＜係長夫人＞になったわけです（この部分が同一視）相変わらずEさんは平社員のままです。Fさんの奥さんは、同じ社宅の中で、今度は係長グループの人達とのお付き合いを始めました。（別にFさんの奥さんが、出世したわけではありません）

こんな関係が、社会的な歪を作り出しているのでしょうか。それでは次に『投影』のメカニズムについての説明です。自分が持っている感情や欲望に気付かず相手の中に、そういう感情を見出し、場合によっては非難、攻撃をすることがあります。「被害妄想」もその一つと言われます。

メロドラマを見て、「私もあんな恋をした～!!」などと言うと、「あなたには、立派なご主人がいるじゃないの。そんなことを言ったら罰が当たるわよ!」などの会話に、＜実は潜在的に、自分も同じようなことを考えている＞のに相手のことを一方的に非難する場合が『投影』に近いでしょう。中には「あなたに、そんな事を言われる筋合いはない! あなたの方がよほど、そう思っているのでしょうか?」と切り返される場合もあります。「余計なおせっかい」や「他人に厳しく、自分に甘い!」と言われる人は要注意です。（よく相手を見て、非難しましょう…）



苦悶

色々な「防衛機制」がありますが、『置き換え』と『昇華』の例を見てみましょう。会社の中で役員から怒られた課長が、部下に対して「お前たちがしっかりしないから、今日役員に叱られた!」と当り散らす人がいます。会社での鬱憤を、家で家族に当たる人もいます。これらは『置き換え』と呼ばれるものです。分かりやすいでしょ!（^^）

自分の中で溜め込むと、ストレスになるので発散させるわけですが、回りの人にとっては、大変迷惑な話です。最近の新聞でのニュース、<突然切れる、動機が判らない>などを見ていると『昇華』の部分が不完全なのではないだろうか？という気がします。

社会的に受け入れられないような欲望を、社会的に受け入れられる建設的な欲望に置き換えることが『昇華』です。中学～高校生活で参加する、「運動クラブ活動」などは、この『昇華』という“ガス抜き”の意味合いもあります。「人を殺したい」とか「人を傷つけたい」という反社会的な欲望が、衝動的に行動に出る前に『昇華』という事で抑えられるプロセスが無いから、事件になってしまいます。部屋に閉じこもって、自分だけの世界を構築することが、危険信号に繋がっています。



合掌

このように、精神分析を理解することは、いろいろな分野に応用できそうですね！

S.フロイトは多くの治療(事例)を通して、心の構造を解き明かしていきます。そして、自分の研究に取り組み、普遍化できるように修正も試みています。「本能の壊れた人間」に着目し、人間と文明・文化との関係性にも注目しており、多くの分野に影響を与えたのです。特に「芸術」と精神分析の考えでは、作品はこころの深層から生まれると解釈しています。フロイト自身が論文に纏めたものとして、レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画やシェイクスピアの戯曲、ドストエフスキーの小説などがあります。

<モナリザの微笑み>で有名なレオナルド・ダ・ヴィンチについて、S.フロイトの研究を紹介しておきます。レオナルドがこの絵を描いたのは50歳を過ぎてからで、実に4年の歳月をかけています。しかし、それでも作品に満足しないレオナルドは、注文主に渡さず持ち歩いています。この絵のモデルといわれる「ジョコンダ婦人」の微笑が、心の中に眠っていた母親の記憶を呼び覚ましたのではないかとフロイトは考えています。

レオナルドには、実の母親と育ての母親がいますが、ほとんど覚えていない「実の母親」の思い出が反映されているのです。レオナルドは無神論者であったが、父親を尊敬していなかった(レオナルドの実母を捨て、別の女性と結婚した)ことにも関係しているようです。この続きは次回、もう少し触れてみようと思います・・・